

2021年国際化学オリンピック [Remote IChO2021]

～国際化学オリンピック2021日本大会は
過去最多の参加者を記録～

第53回国際化学オリンピック2021は日本主催の2回目の化学オリンピックです。2019年には大会組織委員会が発足。準備が進む中、組織委員長の玉尾皓平先生は、「化学は、ザ・セントラルサイエンスと言われ、身の回りには化学の成果があふれています。化学の世界で活躍し、その素晴らしさや面白さを世の中に伝える仲間となってくれる若者の出現を待ち望んでいます」と各国の代表生徒への期待を語りました。



玉尾 皓平 先生
(京都大学名誉教授)
第53回国際化学オリンピック
日本大会2021(IChO2021) 組織委員会 委員長

大会は、新型コロナウイルス感染症の拡大を受け、2021年7月25日から8月2日の日程でリモート開催となりましたが、玉尾委員長の言葉にこたえるように、過去最多の85カ国・地域から、312人の代表生徒が参加しました。

5時間におよぶ理論試験は、世界各地の時差を考慮して一定の時間枠を設けての開始となりました。試験を担当する大会の科学委員会は100台のパソコンで17時間を通して試験を監督し、その4時間後には20時間連続で採点と採点結果が妥当か各国のメンターと最終調整をするなど、時差との格闘でした。

オンラインならではの企画として、普段は見学が難しい最先端科学技術施設「SPRING-8」のバーチャルツアーが行われ、300人を超える代表生徒が参加しました。日本の歴史と文化にふれる見学先となるはずだった奈良と京都はビデオでの紹介となりました。実験試験は中止、生徒間交流もバーチャルとはなりましたが、大会後には、「こんなにスムーズだった大会は初めて」という国際評価も得られました。



バーチャル空間での国際交流



日本代表の4人も健闘し、銀メダル3つ、銅メダル1つを獲得しました。IChO2021日本代表4人のインタビューの様子をコンテストホームページでご覧頂けます。

国際科学オリンピック 初のリモート開催

～国際生物学オリンピック2020長崎大会は
IBO Challenge 2020に～

毎年夏に計31人の高校生らが派遣されている国際科学オリンピック。2020年は新型コロナウイルス感染拡大に伴い、7大会のうち物理、地学、地理は中止に、数学、化学、生物学、情報は急きょリモート開催となりました。

第31回国際生物学オリンピック2020長崎大会(IBO2020)も、「IBO Challenge 2020」と名称を変え、大会史上初めてリモートで開催されました。

～新たなステージに入った国際大会～

IBO2020 組織委員会の浅島誠委員長は「世界の同世代が競い合う機会を無くしてはならないという関係者の強い思いが、ウェブ環境の違いや、試験の公平性をいかに保つかといった課題を乗り越え、リモート開催を実現しました。新しい教育スタイルの提案につながったと思います」とリモートでの国際大会で見てきた可能性を語りました。

53の国と地域から202人の生徒が参加した中、日本代表生徒は金メダル1、銀メダル3と、4人全員が好成績を残しました。



浅島 誠 先生
(東京大学名誉教授)
第31回国際生物学
オリンピック2020
長崎大会 組織委員会 委員長

～リモート下でも国際交流を実現～

金メダリストとなった栄光学園高等学校3年の末松万宙さんは、「貴重な体験でした。実際に器具を使う実験試験がないのは残念でしたが、国際交流の代わりとして参加する『国際グループプロジェクト』が楽しみです」と大会参加の感想を述べました。競い合うことと同様に、科学オリンピックで重要なのが国際交流です。リモートという条件下で新たに企画された「国際グループプロジェクト」では、国籍の異なる4人の生徒がグループを組み、大会OB、OGの学生によるファシリテーションの下、感染症、生物多様性と海洋、ゲノム編集、進化から選んだ1テーマについて約2カ月間リモートで議論した後、ポスター発表をしました。



IBO2020 日本代表の4人